

さっぽろ雪祭り

「第63回さっぽろ雪祭り」が、大通をメイン会場に、本日（6日）から1週間の予定で開催されています。

前は240万人を超える方々が来場しましたが、今年はどうなるでしょうか。昨年の東日本大震災以降、北海道も一時期観光客が激減し、業界の皆さんは大いに心配したところです。外国人観光客は持ち直してきたようですが、震災の影響のないことを祈りたいと思います。

私の職場は、大通公園の直ぐ側にありますので、年が明けてからは、毎日、雪像づくりの様子を見ながら出勤しています。

会場では、自衛隊員の皆さんが実にきびきびと、手慣れた感じで作業しているのが印象的です。

足場を組み、雪を大量に運んで固め、そこから素晴らしい造形を作り出していく様子は、雪像づくりというイメージからはほど遠いものです。しかも、完成された造形は、その巨大さと共に芸術的であり、思わず見とれてしまいます。

「さっぽろ雪祭り」の雪像づくりに自衛隊員が参加するようになったのは、1955年の第6回からだそうです。雪祭りの人気上がる一方で雪像の作り手が足りない。このため、主催者が思案の末、自衛隊に手助けを要請したところ、自衛隊側は、築城訓練の一貫として参加することにしたのだそうです。

当時、世論の一部には自衛隊の参加に反対する声があったそうです。そうした中で、自衛隊の参加を決断した、当時の主催者や自衛隊指揮者の先見と決断には、評価すべきものがあるでしょう。

そもそも「さっぽろ雪祭り」は、札幌観光協会と札幌市の主催によって1950年に開催されたのが始まりで、小樽市の北手宮小学校で行われていた雪祭りを参考にしたといわれています。

最初は、市民の雪捨て場となっていた大通公園の7丁目を会場に、札幌市内の高校生などが美術科教諭の指導の下に6基の雪像を制作しています。

以来「さっぽろ雪祭り」は年々規模が拡大し、雪祭りを目当てに訪れる道外客も増えてきました。特に、札幌オリンピックがあった1972年には世界に

この「さっぽろ雪祭り」が紹介されたこともあり、海外からの観光客も目立つようになっています。

北海道は今、とかく不景気の風が吹いており、暗い話が多いのですが、厳冬期を逆手に取ったようなイベントは先人の知恵でもあります。

「北国の冬の灰色ムードを吹きとばそう」というのが、「さっぽろ雪祭り」がスタートした当時のスローガンだったそうですが、我々も縮こまっていないで、この北の大地北海道を少しでも盛り上げようではありませんか。

(塾頭 吉田 洋一)